

外国人 と 生きる

国際結婚移住者の「声」

横田 祥子 (よこた さちこ)

東京都立大学大学院社会科学研究所

グエンさんのある一日

南国の昼下がり、台湾中部の田舎町、東勢鎮。ここは一八世紀後半中国広東省から移り住んだ客家人(漢族の「集団」)が作った町として有名だ。その目抜き通りのある家電店で、ベトナム出身のグエンさんは、午後娘と店番をしている。「家電」の字のとなりには「ベトナム雑貨あります」の文字。彼女は台湾人の夫が経営する家電店の一角に、ベトナムからも帰った食品や雑貨を置き販売している。

一町が昼寝から醒める午後三時、ふいにベトナム女性がバイクに幼子を乗せて、一人また一人とやって来る。お目当ては、ベトナム女性同士のおしゃべり。彼女たちは「電話が壊れたみたい」「携帯の電池をちょうだい」「電気コードあるかしら」と言いつつ、ついでにベトナムの実家に電話するための国際電話プリペイドカードと、母国からやってきた魚醤やフオー(ライスヌードル)、ココナッツジュースなどを買って行く。そして、甘いベトナム式コーヒーをすすりながら、しばし同じ田舎町に住む友人ベトナム人たちの近況を報告し合い、ときには台湾人の夫のこゝと、家族のことを相談し合う。

グエンさんは今年三十一歳、ベトナム南部カントー省の出身だ。高校在学時、父親の事業が失敗し、家計を助けるため故郷

の工場に働いてきた。その後ホーチミン市へ出て宝飾店で働いていた二〇〇〇年、台湾人である今の夫(閩南人、五〇歳)と見合いをし、単身台湾へ嫁いできた。

生活指導教室で勉強

グエンさん夫婦のように、台湾人男性と外国人女性の結婚は一九九〇年代以降、年々増加しており、二〇〇四年には台湾人男性と外国人女性の国際結婚は、台湾の全結婚数の二五パーセントに上った。花嫁たちの出身国は、中国、ベトナム、インドネシア、タイ、カンボジアなどである。国際結婚の増加は一九八〇年代以降、台湾企業が当該地域に経済投資を増大したことにより、経済交流と人的交流が活発化したためである。一九九〇年代後半以降、ベトナム女性は中国系女性に次ぐ勢力となっており、二〇〇六年二月現在、七万四四二七人が居住している。

彼女たちの多くは、ベトナム南部メコンデルタ出身のキン族で、結婚前は台湾の地を踏んだこともなければ中国語を勉強したこともない。しかし、台湾では家から一歩出れば、迫り来るような漢字世界。夫や姑は、道に迷っては大変、誰かに連れさられては大変、と嫁を子どものように扱う。次第に彼女たち国際結婚移住者は家に閉じこもりがちになり、頼るは家族

のみとなってしまう。結婚移住者のなかには、來台後数年経っても、自分の氏名すら漢字で記せない人もしばしば見かける。しかし、グエンさんは違った。夫の強いすすめもあり、毎日「外国籍配偶者生活指導教室」へと通う。これは、いわば外国人配偶者のために開かれた中等教育クラスである。授業は、毎週月から金曜日まで夜六時半から九時半のあいだ、近所の中学校でおこなわれる。グエンさんは現在、中学二年生の授業を受けている。クラスメイトは、ベトナムのキン族、インドネシア出身の客家系華人のほか、学校を中途退学した台湾漢族やアミ族の学生一〇人だ。

グエンさんは国語、社会、理科、数学、体育、家庭、情報処理といった科目のなかで、体育がいちばん好きだという。バドミントンの授業では、同級生たちを打ち破り、最後はいつも先生と一騎打ちだ。体育の授業終了後、彼女は汗をぬぐう間もなく、次の国語の授業へと走る。その教科書を覗くとびつしりと書き込みがされていて、彼女が家で綿密に予習を済ませてきたことがわかる。

夜九時半に授業が終わると、学校近くのベトナム軽食店へ。ここにもベトナム女性が集まり、フオーをすすり「鴨仔蛋」(孵化直前のアヒルの卵)を食べながら、ひとしきりおしゃべりを楽しんでいる。

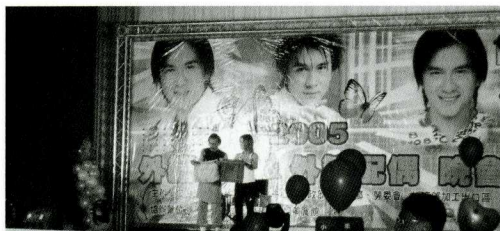
めに、日夜語学力を磨いている。

グエンさんのいちばんの心配は、一人娘の教育だ。彼女は去年九月幼稚園に入園した。これから大学卒業まで長い学校生活が始まる。「子どもの宿題を見てあげられるか心配なの。だからまずは、わたしがしっかりと勉強しなくてははいけないわ」。親子二人三脚の勉強はこれからも続く。

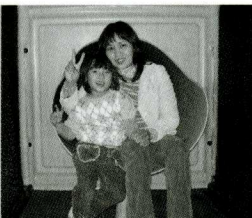
「声」が一丸となるまで

国際結婚が増加しているとはいえ、結婚移住者は依然として台湾社会では異質な存在であり、さまざまな不利益、不平等をこうむっているのが現状である。不利な現状の是正には、言語の獲得とそれを通じ、外界の出来事を解釈し批判する能力が基盤となる。しかしながら、すべての結婚移住者が、体系的に中国語を学ぶ機会に恵まれているとはいえず、まだまだ社会生活を送るのがやっとという段階である。こうした状況のなか、すでに一部の結婚移住者は、台湾社会のなかで改めて主体性を確立しながら、人権の尊重や福祉の拡充を求めている。徐々に「声」を発してきた結婚移住者が増加し一丸となったとき、いかにしてそれを台湾社会と対話していくのか、今後目が離せない。

在台ベトナム人のために開かれたコンサート



グエンさんとお嬢さん



結婚移住者による劇の上演 (2005年 台北市)



「外国籍配偶者生活指導教室」の仲間たち